

Tamagawa Academy - IB Division NEWSLETTER

Issue 04

August 2026

Our parents, their stories

保護者が語る、それぞれの物語

学校コミュニティの一人ひとりに、語るべき物語があります。

Learner Profile Awards

一人ひとりの行動と前向きな姿勢が、未来につながる大きな力になります。

ハンドベル部インタビュー

学校一、音と心が調和する部活動、その情熱の舞台裏へ

DP科目の選択

本校のG10生は、MYPでの学びを終え、DPへの準備を進める時期を迎えています。

目的を持った音楽

本校の生徒バンドが、音楽を通じて赤十字への支援金を集めました！

成功への道を駆ける

K.U.さんが、U-18馬術競技全国大会で日本一に輝きました！

TBCJ

E.I.さんが、名門TBCJ大会で見事全国3位に入賞しました！

G6 Rinkan Gakkou

林間学校



LEADING MACHIDA:

町田を導く：市長との対談



好奇心あふれる二人の生徒が、自分たちの街のリーダーと向き合うと、どのような対話が生まれるのでしょうか。この特別インタビューでは、SさんとYさんが稲垣市長に、町田市の未来へのビジョン、公務を通して学んだこと、そして次世代への期待について伺いました。

TAMAGAWA'S MUSIC FESTIVAL

玉川学園音楽祭



Eye health awareness



Trial Lessons



ファーニバル先生
からの
メッセージ



Mr Furnival's message



IBディビジョン8月号ニュースレターへようこそ。

教室の内外で児童生徒たちが取り組んできたさまざまな活動について、ぜひお楽しみいただければ幸いです。こうした活動を通して、生徒たちはIBディビジョン全体のコミュニティ意識を育んでいます。私にとって特に印象深かったのは、町田市長が地域社会に変化をもたらすことについてお話しされたこと、音楽祭での演奏を聴いたこと、そしてGrade 10のチャリティー・ミュージック・コンサートを鑑賞したことです。このコンサートは、Service as Actionの素晴らしい実践例でした。

私は今、私が育ったイギリス・エセックス州のシェンフィールド図書館でこの文章を書いています。IBの教員や生徒がそうであるように、私も一年のほとんどを国際的な視野を持って過ごしています。しかし、夏になると、家族や友人、そして思い出の場所を訪ねるために故郷へ帰ることが私にとっての楽しみです。それぞれの場所が、さまざまな思い出をよみがえらせてくれます。この図書館は、幼い頃に祖母が連れてきてくれた場所であり、大学で最初に提出した「コミュニティの概念（Concept of Community）」という課題の題材にもなりました。また、教員養成課程の事前課題（pre-reading）を読んだ場所でもあり、教員になってからは、自宅が騒がしいときに授業準備や採点、課題の評価を行っていた思い出の場所でもあります。

シェンフィールドは、ロンドン郊外にある活気あふれる町、ブレントウッドの一部です。誰もが時間に追われ、いつも忙しくしているように感じられます。そのような地域において、図書館はコミュニティづくりに非常に重要な役割を果たしています。図書館は単に本を借りる場所ではありません。人々が出会い、交流し、つながる機会を提供してくれる場所です。この図書館では、「Knit and Natter（編み物とおしゃべり）」「Wellness for Women（女性のためのウェルネス）」「Games Mornings（ゲーム・モーニング）」「Toddler Reading Groups（幼児向け読み聞かせグループ）」など、10種類もの地域コミュニティグループが活動しています。それぞれの活動は、人と人とのつながりを深め、地域の一体感を育み、この忙しい社会の中で孤立感を抱く人を少しでも減らすことを目的としています。

また、この図書館では毎年「Summer Reading Challenge（サマー・リーディング・チャレンジ）」も開催されています。これは、夏休み中も子どもたちに読書が続けてもらうことを目的とした取り組みで、9月には地元の学校で賞が授与されます。きっと Mr Hinchey も賛成してくれることでしょう！ 私自身も子どもの頃にこのチャレンジに参加していましたし、自分の子どもたちにも学校に通っていた頃に参加させました。その経験が、子どもたちの読書好きのきっかけになったのではないかと考えています。

皆さまも、この夏に十分な休息を取り、普段なかなか会えないご家族との時間を過ごし、読書を楽しみ、そしてご自身の地域でどのような活動が行われているのかに目を向け、ぜひ参加してみる機会を持っていただければ幸いです。

9月5日のInternational DayおよびTamagawa Ground Festivalで皆さまとお会いできることを楽しみにしております。



Oliver Furnival

Head of IB Division

[ホーム](#)

Leadership COMMENTS



Ms Takahashi

夏になると、空がいつもより少し高く見えます。どこまでも続く青空を見上げるたびに、子どもたちの可能性もまた、果てしなく広がっているのだと感じます。夏休みは、自分だけの「気づきや学び」に出会える時間です。旅先で出会う景色や文化に心を動かされたり、好きなことに夢中になったり、家族や友人と何気ない時間を過ごしたり。すべての経験が、一人ひとりの個性となり、誰かと響き合う力へと育っていきます。この夏が、一人ひとりにとって心に残る素敵な物語となりますように。どうぞ、ご家族皆さまで、心豊かな夏をお過ごしください。



Mr. Osawa

夏休みは、長いようで短いものです。1つでもいいので、何か普段しないことにチャレンジしてください！私はサーフィンを始めます。

夏休み明けにみんなに聞きますからね。たくさんのチャレンジを楽しみにしています。



Mr. Soai

日本の夏は暑い。その暑さの中で平和の尊さを考える。自分の将来の選択を考えられる幸せは尊い。



Mr. Hinchey

夏は、たくさんの本を読み、自分自身を振り返るのに最適な季節です。Mr Hincheyも、この夏はお気に入りの本を何冊も読み返す予定です。生徒の皆さんも、「Summer Reading Challenge」に挑戦したり、あるいは純粹に読書を楽しんだりする機会を持ってくれることを願っています。そして、この夏の話題作である映画『The Odyssey』は、とても古い本を原作としていることも、ぜひ忘れないてください！

こうして、12年生の皆さんにとってのカウントダウンが始まりました！12年生の第1学期の成績表が配布され、大学出願シーズンが正式に幕を開けました。

また、12年生の生徒たちは、今後数ヶ月にわたって行われるIB試験に向けて、集中した学習リズムを確立しつつあります。夏休みは学業において有意義な進歩を遂げる貴重な機会ではありますが、私は生徒たちに対し、休息を取り、リフレッシュし、家族や友人との時間を楽しむことで、健全なバランスを保つよう奨励しています。健康的な食生活や十分な睡眠など、健康的な習慣を維持することは、これからの数ヶ月間の学業準備と同じくらい重要になるでしょう。



Ms Wei

Learner Profile Award Winners



Y.S. (G6) - Thinker

Yさんは算数の授業において、批判的（クリティカル）かつ創造的な思考力を駆使し、解き慣れた問題だけでなく初めて目にするような難問にも挑み、筋道の通った見事な解決策を導き出しています。



M.M. (G7) - Communicator

Mさんは英語の授業において、トピックに対する事前準備をしっかりと行い、ハッキリとした声で、自信を持って自分のメッセージ（意見）を届けることができます。



N.F. (G8) - Communicator

Nさんは美術の授業において、作品の進捗状況を頻繁に担当教員へ報告し、自身の学びをより深めるために具体的かつ実践的なフィードバックを主体的に求めて行動することができました。



R.H. (G7) - Thinker

Rさんは英語の授業において、フィードバックを素直に取り入れて自身の課題に活かし、クラスでのディスカッションにも積極的に参加しながら、作品の向上に向けて根気強く努力を重ねるという深い振り返りの姿勢を示してくれました。この探究的で思慮深い取り組みが、形成評価における非常に優秀な成果と、学びに対する強い意欲へとつながりました。



H. I. (G8) - Risk-taker

Hさんはホームルームの学級通信の執筆者が募集された際、自ら名乗りを上げてボランティアとして手を挙げてくれました。自ら進んで一步を踏み出し、新しい課題に積極的に挑む「挑戦する人（Risk-taker）」としての素晴らしい姿を見せてくれました。



L.O. (G9) - Social Skills

Lさんのリーダーシップは非常に称賛に値するものです。豊富な知識を持ち、周囲への敬意を忘れず、他のメンバーが成果を出せるよう手助けしながら、グループ全員が議論や作業に貢献できるよう温かく促してくれました。また、自身の理科の知識を存分に活かして、課題の成功に向けてチームをしっかりと牽引してくれました。

LEARNER PROFILE AWARD WINNERS



L.S. (G9) - Caring

Lさんは、常に強い集中力を持ち、授業の枠を超えて学びを深めることで、理科への理解を深める努力を重ねています。自身の学びや理解した内容を、十分かつ高度なレベルで分かりやすく表現・伝達することができています。



K.M. (G10) - Inquirer

Kさんはデザインの授業において、自ら高い目標に挑み、リサーチを通して独立して新しいスキルを習得し、それを実践に移すことで見事な「探究する人（Inquirer）」としての姿を示してくれました。



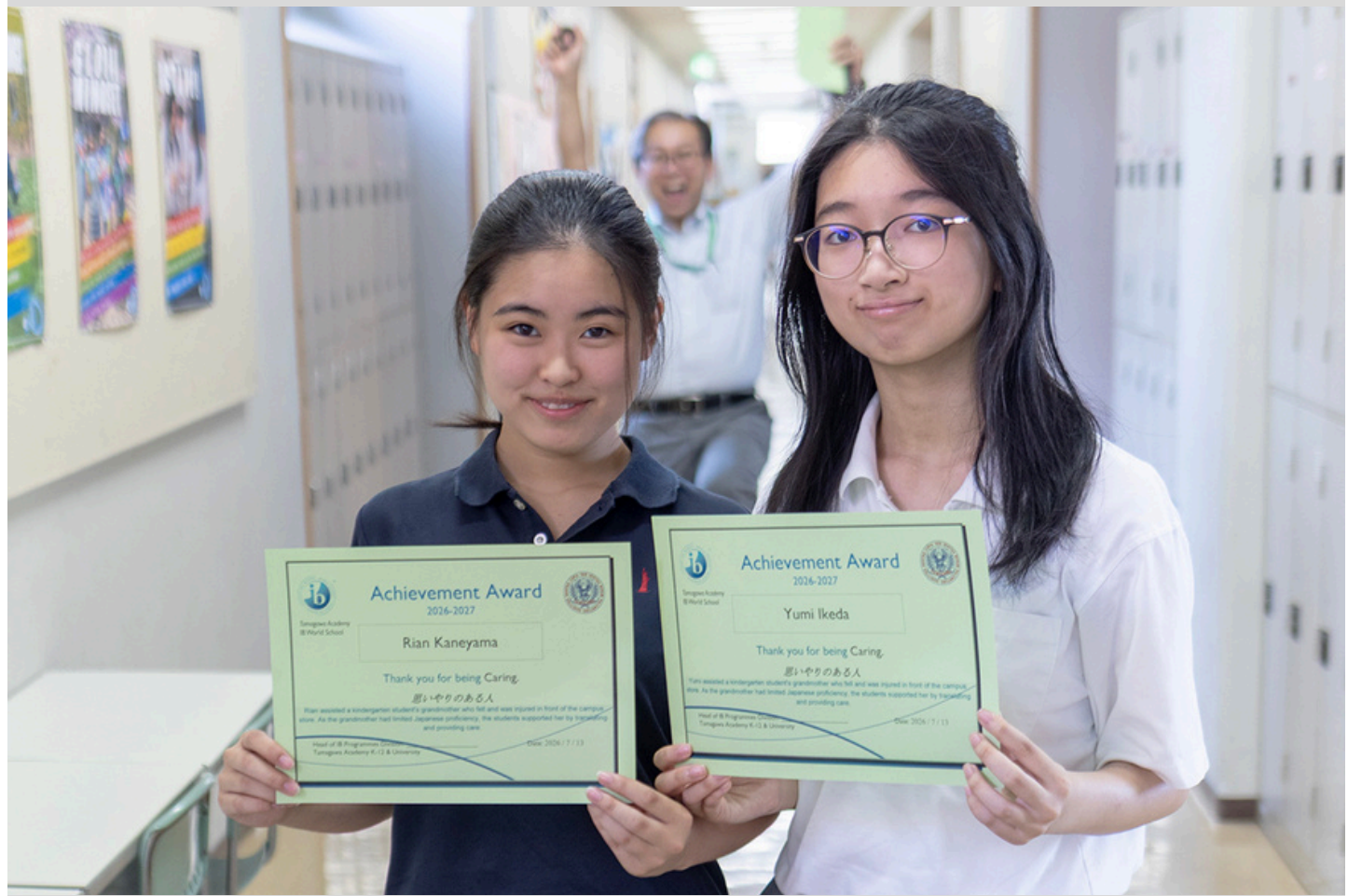
Kento Fukuoka (G12) - Thinker

Kentoさんは経済学の学びにおいて一貫して真摯な姿勢を持ち続けており、非常に優秀な成績で着実にステップアップしている姿を見られるのは、大変微笑ましく誇らしいことです。



K.K. (G10) - Caring

Kさんは登校途中、体調を崩して倒れてしまった小学校3年生の児童のもとへいち早く駆けつけ、手助けをしてくれました。すぐさま学校の事務所へ連絡を入れて状況を正確に報告してくれたおかげで、教員や養護教諭による迅速な救護対応へとつながりました。



R.K., Y.I. (G11) - Caring

Rさんと Yさんは、キャンパス内の売店前で転倒しけがをされた幼稚園児のおばあ様を速やかに救護しました。おばあ様が日本語でのコミュニケーションに不慣れであったため、二人は通訳をしながら優しく寄り添い、介抱を行いました。

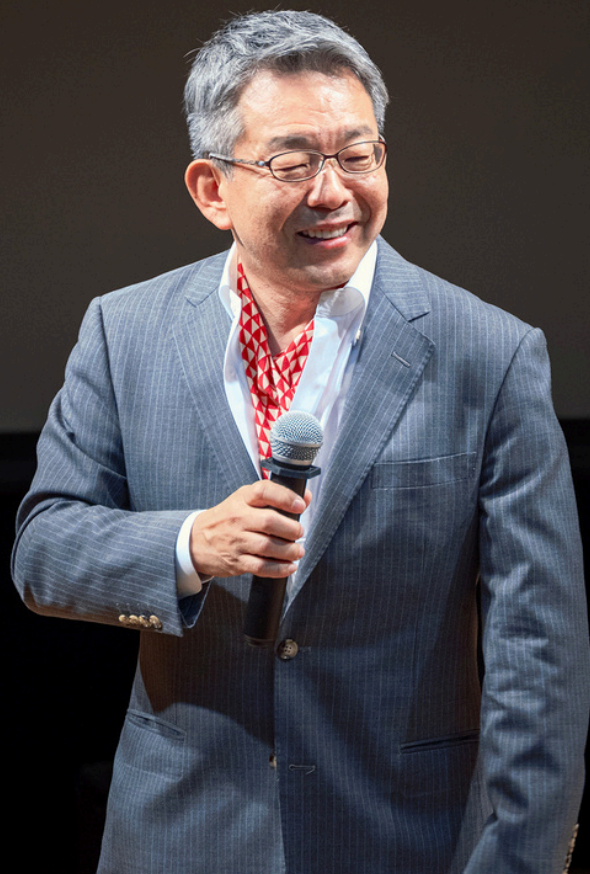
Sami Cote (G12) - Researcher

Sさんは経済学の授業において、いかなる時も諦めない粘り強さと復元力（レジリエンス）をもって毎日の学びに励んでいます。課題や困難に直面した際にも、粘り強く真摯に向き合い続けています。

Our Parents, their stories

-保護者が語る、それぞれの物語-

T.K.



探検家。サイクリスト。ドライバー。そして、実業家——。

これらはどれも、あらかじめ綿密に描かれた未来の計画にあったものではありませんでした。しかし、その一つひとつが、ある一人の人物の素晴らしい人生の歩みにおいて欠かせない「大切な章」となったのです。

今月は、IBの卒業生Rさんのお父様であるT.K.氏をアセンブリーにお迎えしました。「夢を持つこと」の本当の意味を改めて問いかけるとともに、あらかじめ「すべての答え」を用意しておくこと以上に、なぜ情熱や粘り強さ、そして予期せぬ出来事を受け入れる心が大切なのかを紐解きます。

「夢は今、必要か」

小学生の頃、学校で「将来の夢」を書かされ、「冒険家になる」と文集に書きました。でも本当はテレビやラジオに夢中でした。中学・高校では自転車にのめり込み、山を走り、崖から落ち、遭難も経験しました。大学からは車。スピンやエンジンブロー、事故や失敗を繰り返しても、好きだから続けました。

社会人になって初めて、「自分の提案で人を幸せにしたい」という夢ができました。しかし最初の四年間は失敗続きで、会社一番の落ちこぼれ。それでも続けるうちに結果が出始め、夢がかなったかなと思った頃、突然請われて父の会社へ転職しました。



しかし現実には厳しく、社内外の問題が山積みで、倒産の影さえ見える始末。毎日、目の前の課題に夢中で向き合い、一つ一つ積み重ねる日々。その先に、今の仕事があります。

日本人が日本のことを一番知らない——そんな現実を少しでも変え、日本の文化や価値を伝える仕事に、大きな意義を感じています。

振り返ると、人生は夢を追いかけたというより、その時々で夢中になったことの積み重ねでした。失敗を受け止め、しっかり咀嚼し、目の前のことに全力を尽くす。その経験こそが、何ものにも代えがたい財産になる。私はそう思います。

T.K.



一人の玉川学園の先輩が「市長」へと至る背景には、一体どのような人生の転機があったのでしょうか？今回の独占インタビューでは、SさんとYさんの2名が、市長の素晴らしい歩みの裏側にあるストーリーを紐解きます。

思いがけないキャリアの転換から、リーダーシップ、コミュニケーション、そして地域社会に貢献することから得た学びまで——市長の今日までの道を形作ってきた数々の貴重な経験をご紹介します。

When you were a student at Tamagawa Academy, did you ever imagine that you would one day become the mayor? (玉川学園の生徒だった頃、ご自身が将来市長になることを想像していましたか？)

全く想像していませんでした。市長になる前は医師として働いていました。父も医師だったので、小学生の頃から医師になることが夢でした。当時、玉川学園には医学部がなかったため、医学部のある学校へ進学し、その夢を実現することができました。

学生時代には、市長になることなど考えたこともありませんでした。しかし振り返ると、公の仕事に携わろうと思ったきっかけが三つありました。

一つ目は、コロナ禍で町田市 of 理事を務めた経験です。行政がルールを作る際には専門的な知識が欠かせないことを実感し、自分の経験を生かしてより良い仕組みづくりに貢献したいと思いました。

二つ目は、商工会議所で政策提案に携わったことです。「提案するだけでなく、自分の手で実現したい」という思いが強くなりました。

三つ目は、学校医として約4,000人の子どもたちと接した経験です。挨拶を交わす機会が少ないことに気づき、人と人とのつながりやコミュニケーションを育む社会づくりの大切さを感じました。こうした経験から、市長という立場であれば、そのような社会づくりに貢献できるのではないかと考えるようになりました。

Looking back on your time at Tamagawa Academy, what is your most memorable memory? (玉川学園で過ごした学生時代を振り返って、一番印象に残っている思い出は何ですか？)

一つだけ選ぶのは難しいですね。それほど多くの素晴らしい思い出があります。勉強よりも友達と遊んでいた記憶のほうが強いくらいです（笑）。音楽祭や体育祭、演劇などの学校行事は学生生活の大きな部分を占めていて、その練習にも一生懸命取り組んでいました。

今振り返ると、一番の財産は生涯続く友情です。今でも最も親しい友人の多くは、小学部時代に出会った仲間たちです。その絆は何十年経った今でも続いており、とても大切にしています。

When you first became mayor, what was the biggest challenge you faced? (市長に就任された当初、最も大きな課題は何でしたか？)

どの自治体にもさまざまな課題がありますが、私が最も重要だと感じたのは、市民の声が十分に行政へ反映されていないことでした。計画がほぼ完成してから意見を求めても、大きく変更することは難しい場合が多かったのです。

そこで私は、計画づくりの初期段階から市民が意見を出し、行政と一緒に考えられる仕組みをつくりたいと考えました。互いの意見に耳を傾け、共通点を見つけることが、より良いまちづくりにつながると信じています。



What does a typical day as mayor look like? (市長としての一日はどのような一日ですか?)

毎日違いますが、普段は朝8時頃に市役所へ出勤します。仕事が始まる前には庁内を歩き、職員の皆さんに挨拶をしています。全員と話すことはできませんが、顔を合わせて感謝を伝え、日頃からコミュニケーションを大切にしています。

一日は会議や来客対応、地域イベントへの参加などで忙しく過ぎます。大勢の前でスピーチをすることは今でも難しい仕事の一つですが、コミュニケーションはまず「挨拶」から始まると考えています。そのため、市内の小学校を訪れ、朝の登校時に子どもたちへ挨拶をする活動も続けています。町田の子どもたちに、気持ちよく挨拶をする習慣が広がってほしいと願っています。

Since becoming mayor, have you discovered any new strengths in yourself? (市長になられてから、新たに気づいたご自身の強みはありますか?)

市長としてはまだ歩み始めたばかりなので、自分自身についてもこれから学ぶことがたくさんあると思っています。自分で強みを決めるのではなく、市民の皆さんが私の仕事を見て評価してくださるものだと考えています。

今は毎日ベストを尽くすことだけを心がけています。そして学生の皆さんに伝えたいことがあります。18歳になったら、ぜひ選挙へ行ってください。皆さん一人ひとりの一票には、大きな意味があります。

You once dreamed of becoming a doctor. What helped you achieve that goal? (医師になることが夢だったそうですが、その夢を実現するために大切だったことは何ですか?)

医学部を目指す頃には、本気で勉強しなければならないと分かっていました。それ以上に大きかったのは、自分に合った勉強法を見つけていたことです。中学生の頃に自分なりの勉強のルーティンを確立し、それを続けてきました。

勉強法は人それぞれです。だからこそ、できるだけ早く自分に合った学習スタイルを見つけることが大切だと思います。自分に合う方法が見つかれば、学びはより効率的で楽しいものになります。

What advice would you give students who hope to make a positive impact on their communities? (地域社会に良い影響を与えたいと考えている生徒たちへ、アドバイスをお願いします。)

まずは、明確な目標を持つことが何より大切です。目標を山の頂上だとすると、そこへたどり着く道は一つではありません。一度選んだ方法にこだわりすぎると、もっと良い道を見逃してしまうことがあります。

さまざまな人の意見に耳を傾け、議論を重ねながら、その時々で最も良い方法を柔軟に選んでいくことが大切です。



“私自身の目標は、「町田を誇れる街にすること」です。市民一人ひとりが「町田に住んでよかった」と思える街を目指して、日々取り組んでいます。”

Do you have a message for the students of Tamagawa Academy?（玉川学園の生徒たちへメッセージをお願いできますか？）

今はAIやデジタル技術が急速に発展する時代です。これからは仕事のあり方も大きく変わっていくでしょう。だからこそ、これまで以上に大切になるのが「コミュニケーション力」です。技術は多くの仕事を支えることができますが、人と人とのつながりを築くことは人間にしかできません。

玉川学園には、自然とコミュニケーション力を育める環境があります。私自身、小学部で学んだ経験が今の自分の土台になっています。本当に玉川学園で学べて良かったと感じています。

皆さんがこれからも成長し、新しいことに挑戦しながら、社会で大きく活躍されることを心から応援しています。



対談の締めくくりとして、何よりも印象的だったメッセージがあります。それは、「リーダーシップは傾聴（話を聴くこと）から始まり、意味ある変化は明確なビジョンから生まれ、そして力強いコミュニティは人々との真心の通ったつながりによって築かれる」ということです。玉川学園の生徒から医師、そして現在は町田市長としての道のりを振り返りながら、稲垣市長は「成功とは決まった一本道ではなく、探究心や根気強さ、そして他者から学ぼうとする謙虚な姿勢によって形作られるものだ」と私たちに教えてくれました。

玉川学園のコミュニティのためにご自身の貴重な経験とアドバイスを共有してくださった稲垣市長に、心より感謝申し上げます。市長の言葉が、児童生徒たちにとって対話を大切にし、他者に貢献し、未来を切り拓く次世代のリーダーへと成長していくための大きな刺激（インスピレーション）となることを願っています！

Tamagawa's MUSIC FESTIVAL

玉川学園の音楽祭は、単に音楽の才能を披露するだけの場ではありません。それは児童生徒たちの「粘り強い努力」「協働」、そして「人間的な成長」の証でもあります。

今月号では、この愛され続ける伝統行事がなぜこれほどまでに深い意味を持つのかについて、Mr. Suzuki と Ms. Takahashi のお二人に振り返っていただきました。ステージの上はもちろん、本番までの過程の中で児童生徒たちが学ぶ数々の教訓、そしてこの音楽祭がどのように玉川の「全人教育」の理念を体現しているのかについて語っていただきます。

今年の音楽祭では、6年生と9年生の合唱を指導し、指揮を担当しました。特に9年生の合唱は、私にとって大きなプレッシャーのある取り組みでした。毎年同じ曲を演奏する伝統があり、私自身も9年生だった頃に歌った曲だからです。

練習が始まった当初は、「本番までに本当に完成するだろうか」と不安を感じることもありました。まずは生徒たちがしっかり歌えるようになることに必死で、一つひとつ課題を乗り越えながら準備を進めていきました。

本番前の2週間は、指導者として特に多くのことを考えました。音楽には唯一の正解があるわけではなく、「どのような音楽をつくりたいか」によって表現は変わります。同じ曲でも、指揮者やその年の生徒たちによって全く違う演奏になるのです。



本番前日、チャペルで生徒たちに「この学年は全員が全力を出したときに、ものすごい力を発揮できる。しかし、一人でも本気で向き合わなければ、その力は届かない」という話をしました。私は、200人対1人で音楽をつくるのではなく、指揮者である私と生徒一人ひとりの1対1の積み重ねによって合唱が生まれると考えています。

若い教員の私には、先輩方のような立派な言葉はまだ言えません。それでも、等身大の言葉で素直に思いを伝えたことが、生徒たちの心に届き、本番では全員が全力で歌う姿につながったのだと感じています。

Haruto Suzuki



Tamagawa's MUSIC FESTIVAL



響き合う

一人では生まれないハーモニー
一人では得られない成長

MICHIKO TAKAHASHI

私は、「響き合う」という言葉が好きです。音だけではなく、心も思いも、人は誰かと響き合うことで、より豊かな人生になると信じています。認め合い、励まし合い、学び合い、違いを受け入れ合う。そして、ともに成長する。そのすべてが、「響き合う」という言葉の中にあるように感じています。だからこそ私は、一年の学校行事の中でも、音楽祭が大好きです。

音楽祭で心を動かされるのは、ホールに響く完成された歌声だけではありません。そこに至るまでの、すべての過程です。

「今はうまく歌えなくても大丈夫。大切なのは、できるようになろうと努力すること。」

音楽祭は「上手な人が輝く舞台」ではなく、「挑戦した人が輝く舞台」であって欲しい。最初は自信がなく、小さな声しか出せなかった生徒が、日々の練習を通して堂々と歌えるようになる。そして、その成長を仲間が自然に認め合い、「頑張ったね」と笑顔で声を掛け合う。互いを認め合う姿こそが、この行事がくれる一番の贈り物です。

私は、生徒たちが「音楽が好き」と思って卒業してくれること以上に、「仲間と一緒に挑戦してよかった」と思って卒業してくれることを願っています。

音楽は一人でも楽しめますが、本当の感動は、仲間と心を一つにしたときにこそ生まれるものだからです。



一人では生まれないハーモニーがあるように、一人では得られない成長があります。

今年の音楽祭でも、生徒一人ひとりが仲間を信じ、支え合いながら挑戦する姿をたくさん観ることができました。この大切な体験が、子どもたちのこれからの人生を彩るかけがえのない宝物になることを、心から願っています。



Department focus: LANGUAGE A



A.O. (G8)

English Language and Literature

英語言語と文学の授業では、『The House on Mango Street（マンゴー通り、ときどきさよなら）』という作品を読んでいます。この作品は、短い物語で構成されたリアリズムの成長小説です。物語はエスペランサという少女の視点で語られ、シカゴの低所得者層の地域で暮らす中で経験するさまざまな出来事が描かれています。少女から若い女性へと成長していく過程で、エスペランサは居心地の悪い出来事や困難な状況にも直面します。

普段リアリズム小説を読むことがあまりないので、『The House on Mango Street』はとても興味深い作品でした。この本を通して、社会の価値観や固定観念が、人々に良い影響だけでなく悪い影響も与えることを学び、世界についての理解を深めることができました。

授業では、IBの学習者像の「心を開く人（Open-Minded）」や、ATLスキルの「コミュニケーション」を特に意識して学習しています。グループで質問に答えたり作品を分析したりすることで、クラスメートと意見を交換し、自分一人では気づかなかった新しい視点を知ることができます。このような協働学習によって、作品についてより深く考え、さまざまな考えを共有することができました。

また、英語の授業では年間を通してPEAEAL段落を書く練習を続けています。この形式で文章を書くことはとても難しいですが、文章力を高め、語彙を増やし、一つのテーマを深く分析する力を身につけることができました。自分の書く力が向上していることを実感でき、とてもうれしく思っています。

全体を通して、英語言語と文学の授業で学ぶことをとても楽しんでおり、この単元だけでなく、これから学ぶ新しい単元にも期待しています。

今月は、「レトリックとプロパガンダ」のユニットの一環として、スピーチの書き方を学び、アセスメントに向けてスピーチを作成しました。

準備のための授業では、ロシア・ウクライナ戦争において用いられているプロパガンダの手法について分析しました。例えば、ウクライナ政府の公式Instagramアカウントに投稿されたリール動画を取り上げ、一方的な情報だけを提示することで人々の意見を誘導する手法について考察しました。

今この授業を通して、以前学習したプロパガンダの技法を復習するとともに、戦争に関する報道が双方においていかにプロパガンダを活用しているかについて、新たな理解を深めることができました。

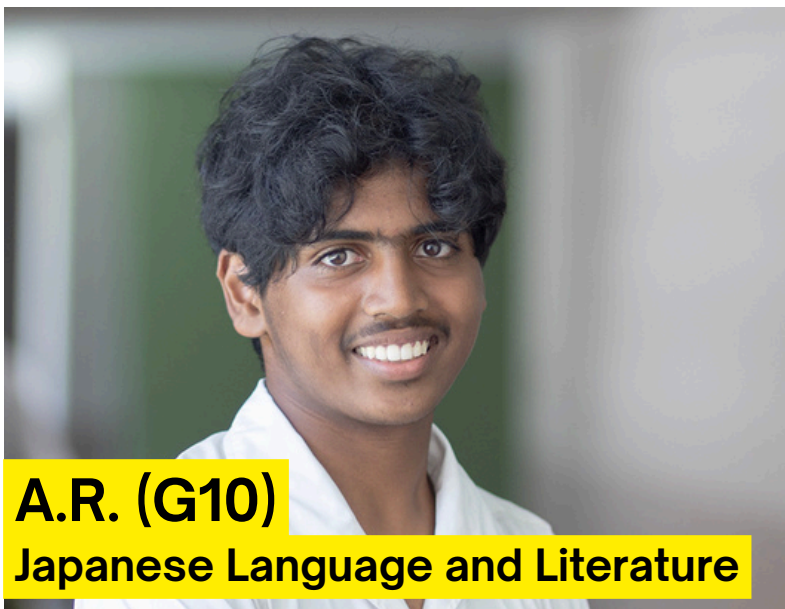
その後、自分たちでスピーチを作成し、クラスメートの前で発表してフィードバックを受けました。この活動では、ATLスキルの「社会的スキル」を活用し、仲間からの意見を取り入れながらスピーチをより良いものへと改善しました。また、「創造的思考スキル」を生かし、自らプロパガンダの技法を取り入れることで、より説得力があり、聞き手を引きつけるスピーチを目指しました。

最後に、アセスメントとしてスピーチを発表し、パブリックスピーキングの力を実践的に磨きました。最初は緊張しましたが、大勢の前で話す経験を通して、人前で伝える力を高めることができたと感じています。このような経験は授業の中では意外と多くないため、とても貴重な機会でした。また、パブリックスピーキングは学校生活だけでなく、将来さまざまな場面で役立つ重要なライフスキルであることも実感しました。



L.W. (G10)

English Language and Literature



国語の授業では、ジョージ・オーウェルの「絞首刑」を学習しています。テーマや歴史的背景、表現技法、そして物語の変化など、作品の分析を行っています。現在は、作品全体を通してオーウェルが伝えようとしている主題を分析し、アセスメントに向けて準備を進めています。授業では、ただ表の内容を分析をするのではなく、作者がどのような意図を持って表現を選んだのかを理解することにフォーカスを当てています。

日本語の授業で楽しいのは、作品の主題について、新たな視点や考え方を得られることです。また、それぞれの物語に込められた意味について話し合ったり、作家ごとに異なる表現方法に触れたりするのも好きです。人間性や社会についてどのようなメッセージを伝えているのかを考えるのも、とても興味深いことです。

授業において、最もふさわしい学習者像はThinkers（考える人）だと思います。私たちは単純に表面的なことだけでなく、作品を詳細に理解するために深く掘り下げて考察します。さらに、作品の様々な側面を見出し、それらを主要なテーマや作者の表現上の選択と結びつけて考えます。もう一つはCommunicators（コミュニケーションが取れる人）です。授業中に積極的にコミュニケーションを取って、互いの考えを共有しています。

12年性の英語 言語と文学の授業では、口述分析（IO）、ペーパー1、ペーパー2といった重要な評価に向けた準備や、模擬試験に取り組んできました。ペーパー1では、見たことのないテキストを分析し、作家がどのように文体的、構造的、言語的な技法を用いて意味を形成し、読者に影響を与えているのかを考察します。ペーパー2では、自己管理能力と批判的思考力が求められ、初見のプロンプトに対してこれまでに学習した2作品を比較して論じます。



このコースの大きな柱の一つがIOであり、選んだグローバル 이슈を通して文学作品と非文学作品を分析し、その内容を10分間で先生の前で発表します。このアセスメントでは、自分の考えを明確に伝え、プレッシャーの中で質問に答える力が求められるため、コミュニケーション能力が大きく伸びます。難しく、緊張する場合がありますが、自信を高め、将来の学業や職業における環境への準備にもなります。

授業では、詩、戯曲、ドキュメンタリー、ポッドキャストなど、幅広いジャンルの作品に触れ、分析していきます。代表的な作品も学ぶことによって、作家が使用する表現技法の効果や意図を読み取る批判的思考力が高まりました。これらの学習を通して、特に創造的思考力、コミュニケーション、自己管理と言ったATLスキルが身につき、考えを整理し、深く分析し、明確かつ効果的に自分の解釈を表現できるようになりました。

英語の授業を通して、私が最も魅力を感じているのは、テキストへの向き合い方が大きく変化したことです。表面的な理解にとどまらず、より主体的かつ文革的に作品や映像を捉えるようになりました。また、フェミニズム詩や様々なグローバル・イシューを学ぶことで、性差別、や人種差別、家父長制、部室主義といったテーマの理解が深まり、より広い視野と批判的な意識を持つことができるようになりました。



From MYP to DP: Choosing the Path Ahead

MYPからDPへ：
今後の進路を選ぶ

10年生の生徒たちは、MYPの最終学年を終えるとともに、DPに向けた準備を始め、ワクワクする新たな章を歩み始めています。DPの科目選択は重要なマイルストーンであり、ここ数ヶ月間、生徒たちは選択肢を検討し、将来の学習について十分な情報に基づいた判断を下すための多くの機会を得てきました。

4月から、各教科の担当教員がIBコアの授業の中で、さまざまなDPの開講科目やレベルについて紹介しました。これらのプレゼンテーションを通じて、生徒たちは学習する内容、予想されるアセスメントの種類、そして異なる科目間の学際的なつながりについて貴重な知見を得ることができました。これにより、各コースが何を提供しているのか、また異なる科目の組み合わせが自分の興味や将来の目標をどのように支えてくれるのかについて、より明確に理解することができました。

これらのプレゼンテーションを補助する形で、10年生は「G10・G12科目選択交流会」の一環として、1週間にわたり12年生と一緒に昼食をとりました。こうした気さくな会話を通じて、生徒たちは現在DPコースを受講している先輩たちの体験談を直接聞くことができました。12年生の生徒たちは、学習習慣や学習戦略、各科目の課題ややりがいについての率直な感想を共有し、10年生の生徒たちが自身の選択を検討する上で役立つ実践的なアドバイスを提供しました。

7月8日には、生徒と保護者の皆様が「DP科目選択説明会」に参加する機会も設けられ、各科目の担当教員に質問をしたり、コースの学習内容や進路についてさらに詳しい説明を受けたりすることができました。

これらの機会を通し、10年生の生徒たちが、このプロセスにどれほど真剣に取り組んでいるかを目の当たりにできて、大変嬉しく思います。多くの生徒が、自身の興味、強み、将来への志を慎重に振り返りながら、大学や学部プログラムについて調査に時間を費やしてきました。十分な情報を得た上で科目選択を行うという彼らの姿勢は、DPを始める上で大いに役立つ成熟度を示しています。



夏休み明けもこの取り組みは続き、10年生の生徒たちは11年生のDP授業を見学し、DPの学習環境や求められることを実際に体験します。この授業見学の後、生徒たちは12月4日に始まるDPソフトスタートに先立ち、2回目にして最終となる科目選択アンケートに回答します。生徒たちがIBの旅の次の段階へ向けてこれらの最後のステップを踏み出す姿を見ることを嬉しく思うとともに、DPへの移行期において彼らを全力でサポートしていくことを楽しみにしています。



TRIAL LESSONS

Discovering the Joy of Learning
at Tamagawa

体験授業：学びの歓びを、玉川学園で

7月18日（土）、玉川学園にて体験授業が開催され、多くの受験生と保護者の皆様をお迎えしました。活気あふれる本校のコミュニティを直接体感していただくこの日、キャンパス中の教室が、手を動かして行う発見、創造的な課題解決、そして心温まる交流で満たされました。

家庭科の授業では、あちこちで手際よく作業が進められ、楽しそうな笑顔が広がる中、身近な食材や素材を通して一生ものの実践的なスキルが育まれました。参加されたご家族は肩を並べて作業に取り組み、アットホームな雰囲気の中で温かい会話が弾んでいました。校舎の外で育てている藍をカットして絞り出した染料を使って、ハンカチを染める体験も行われました。

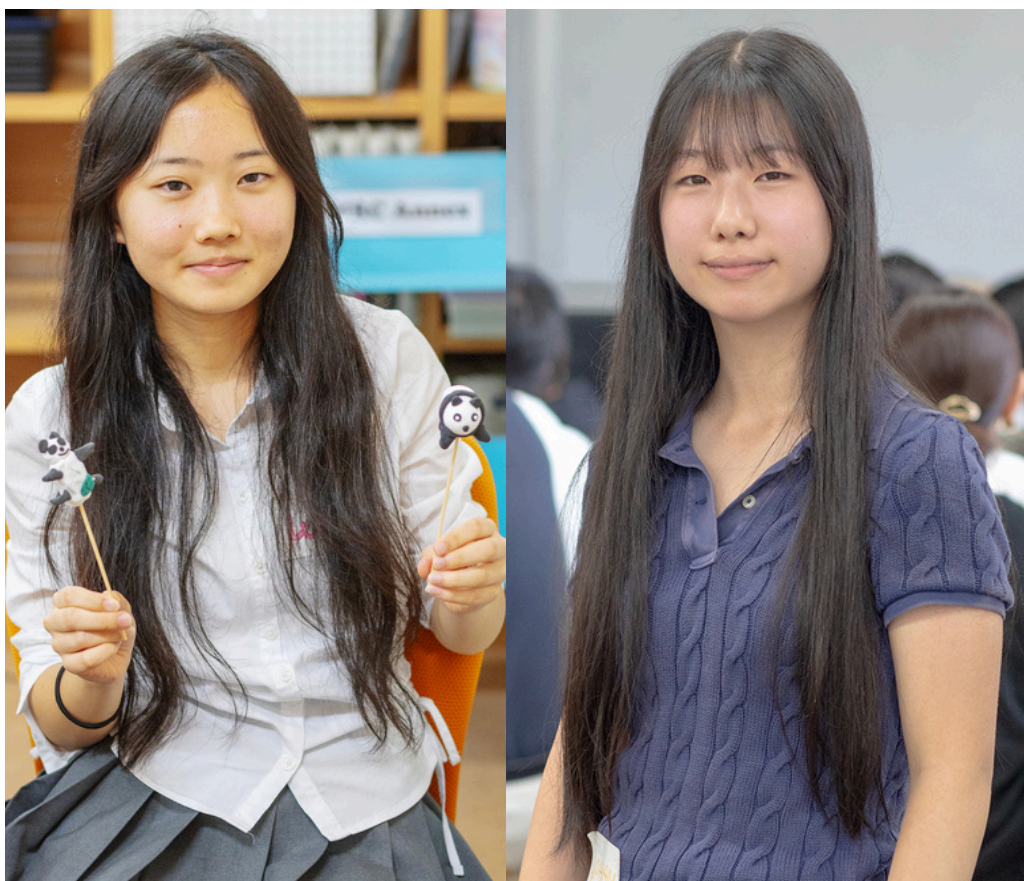
理科室では、保護メガネを着用し、魅惑的な実験に挑戦しました。仮説を検証する中で教室中が驚きとワクワク感に包まれ、理解が深まった瞬間に目を輝かせながら、参加者は探究型の学びに積極的にのめり込んでいました。

一方、数学の授業では、数字が決して退屈なものではないことが証明されました。参加型のパズルや協力して挑む課題を通して数学的コンセプトが生き生きと表現され、論理的思考力を働かせることの楽しさを実感していただきました。



しかし、何よりもイベントを一番盛り上げ、主役となったのは、生徒ボランティアたちの素晴らしい貢献と情熱でした。「スタッフたちは本当に見事でした。来校されたご家族とじっくりと会話を交わし、私たちの学校の質の高さを存分にアピールしてくれました」と、ある先生も深い感銘を受けて語っていました。

この胸が高鳴るような素晴らしいイベントを成功へと導いてくださった参加者・スタッフの皆さま、本当にありがとうございました！





Riding to Success

成功への道を駆ける

K.U.

卓越したスキル、自信、そして強い意志をもって、Kさんが「関東選抜馬術大会（山梨総合馬術・クロスカントリー競技）」にて素晴らしい成績を収めました！全国総合4位、そして18歳以下の部（U-18）では見事「優勝（第1位）」に輝き、世界で最も過酷な馬術競技の一つで秀でるために必要な、たゆまぬ努力と粘り強さを存分に示してくれました。
この誇らしい素晴らしい偉業に、心からの大きな拍手を送ります！

Q. 学業と両立しながら国際的な馬術大会で目覚ましい成果を収めていますが、学問的な目標と馬術への情熱を両立させるのはどれくらい大変ですか？

A. 「常に目の前のひとつのことに集中すること」に尽きます。例えば今日乗馬があるなら、まずはそれだけに集中し、その後に学校の勉強に取り組むようにしています。あれもこれも一度に考えようとするとストレスが増えるだけなので、常に「今」に集中し、自分のやるべき責任をひとつずつ着実に果たすことがカギだと思っています。

Q2. 世界中のライダーと競い合うために遠征することは素晴らしい経験だと思います。競技者としてだけでなく、一人の人間として、こうした大会から何を学びましたか？

A. これらの大会を通して、「成功＝勝つこと」だけではないということを学びました。大きな舞台で戦うことは非常に大きなプレッシャーを感じますが、そのプレッシャーのせいで「楽しむ心」まで奪われる必要はないと気づいたんです。大会中に起こることや結果のすべてを自分自身でコントロールすることはできませんが、「準備」「姿勢」「どれだけ努力するか」は自分でコントロールできます。何が起こるかを恐れるのではなく、置かれた状況を受け入れて最善を尽くすようにしています。また、目標を達成するには、毎日の「一貫性」と「小さな改善の積み重ね」が必要であることも学びました。





Q3. 馬術での成功は、人と馬とのパートナーシップにかかっています。愛馬から学んだ最も重要な教訓は何ですか？また、それが学校生活にどのような影響を与えていますか？

A. パートナー（愛馬）との間で最も学んだ教訓は、「お互いを理解し合うこと」です。良い結果が出ずに悔しい思いをすることもあります。そのフラストレーションを馬にぶつけることは絶対にしません。馬は気持ちを言葉で説明できないからこそ、乗り手は忍耐強く、よく観察し、馬の視点に立って理解しようとする姿勢が必要です。

これは学校での過ごし方にも影響を与えています。人間も自分の気持ちを常にわかりやすく言葉で表現できるとは限りません。だからこそ、相手をすぐに決めつけたり判断したりしないよう心がけています。忍耐強くコミュニケーションをとり、自分の感情をコントロールし、相手の立場に立って物事を考えることを学びました。

Q4. 多くの保護者が「子どもが夢中になれる情熱を見つけてほしい」と願っています。これまでの歩みを振り返って、学校生活と学外での夢の両立に悩む後輩たちへアドバイスをお願いします。

A. 僕からのアドバイスは、「学校との両立が難しいから」という理由だけで夢を諦めないでほしい、ということです。キャパシティを超えてしまったり、遅れをとったり、「自分は十分な人間なのだろうか」と悩んだりする時が必ずあります。ですが、一度にすべてを改善する必要はありません。毎日、小さな一步を踏み出すことだけに集中してみてください。





Teenage Business Contest Japan

E.I.

E.I.さん（11年生）が「Teenage Business Contest Japan」の全国大会に出場し、彼女のチームが見事【第3位】に輝きました！

128校以上、10カ国を超える参加者の中から見事トップ10のファイナリストに選出された彼女は、抜群の創造性、協働力、そして起業家精神（アントレプレナーシップ）を発揮してくれました。彼女の挑戦のストーリーを、ぜひご覧ください！

「Nichinan Bridge（日南ブリッジ）」の本当の原点は、私のおじいちゃんの物語から始まります。おじいちゃんが他界した後、宮崎県日南市にある家は地元の買い手も見つからず、今後の見通しも立たないまま、何ヶ月も空き家の状態が続いていました。思い出が詰まった家が、人口減少が進む街で『単なる放置された空き家』へと変わっていく様子を目の当たりにし、私はふと疑問を抱いたのです。「家を必要としている人と、住人を必要としている家をつなぐことが、なぜこんなにも難しいのだろうか？」と。その問いから生まれたのが「Nichinan Bridge」です。日本の地方へ移住したい外国人と地方の空き家をマッチングし、引っ越しから現地での生活基盤づくりまで、すべてのプロセスをトータルでサポートするプラットフォームです。

現在、日本には900万戸以上の空き家が存在し、その多くは宮崎県日南市のような地方都市に集中しています。そこでは人口減少が進み、地元の買い手がつかないまま家が放置されています。その一方で、「静かに暮らしたい」「小さなビジネスを始めたい」という夢を持ち、日本の地方に移住したいと本気で願っている外国人が何千人も存在します。しかし、彼らはその手続きをどう進めればよいのか分かりません。ビザの規定は複雑で、書類は日本語、さらに移住後も誰も教えてくれない複雑な営業許可の手続きが立ちはだかります。

Nichinan Bridge は、この問題を最初から最後まですべて解決（エンドツーエンドでサポート）します。物件と最適な人材をマッチングし、移住のあらゆるステップを支援し、到着後の事業立ち上げまでサポートします。さらに、AI与信スコアリングを活用して少額融資（マイクロローン）の適格性を評価することで、移住や起業の費用がハードルにならない仕組みを整えています。

一番大変だったのは、プレゼンテーション後の質疑応答（Q&A）でした。審査員からは、財務計画や、所有者不明の物件を扱う際の法的モデル、今後のスケール（事業拡大）計画など、非常に鋭い質問が飛び交いました。事前に準備していた質問もありましたが、世界中の観客の前で、その場の機転を利かせて考え抜かなければならない場面もありました。この経験を通して、「優れたビジネスアイデアは仕事の半分に過ぎない」ということを学びました。ビジネスのあらゆる側面を深く理解しているか、あるいは少なくとも理解しようと努力することが不可欠です。なぜなら審査員は、自分がまだ考え抜けていない『隙間』を的確に見抜いてくるからです。

共同創業者であり、私のいところでもある M は、この大会のためにモナコから駆けつけてくれました。私たちは背景も視野も全く異なりますが、だからこそプロジェクトがより強固なものになったと感じています。私が日本側の課題——物件、法的枠組み、地域の文脈——に集中する一方で、M はヨーロッパや南米から日本の知識ゼロでやってくる人の視点など、より国際的な観点をもたらしてくれました。この2つの視点があったからこそ、一人では気づけなかったことに気づくことができたのです。本当に自然なコラボレーションであり、この挑戦を一緒に達成できたことに心から感謝しています。



HANDBELL CLUB

H.K. & L.F.

たった一つのベルの音色から、美しく心に響く音楽を生み出すには何が必要なのでしょう？

今回の特別インタビューでは、LuicaさんとHinaさんがハンドベル部の舞台裏へと私たちを案内してくれます。これまでの活動経験や一番の思い出、そして個々の「一音」を美しいハーモニーへと昇華させるチームワークの秘密について語ってくれました。

Q. ハンドベル部に入ってどれくらいになりますか？

L：私は4年半になります。

H：私は3年半になります。

Q. なぜハンドベル部に入ろうと思ったのですか？

L：音色を聞いたこともなかったのですが、ハンドベルにすごく興味があって「一度体験してみよう！」と思ったのがきっかけです。

H：Lに「入らない？」って誘われたのがきっかけで、それからずっと続けています。

L：部員が足りてなかったんです！（笑）

Q. 現在、部員は何人いますか？

L：部員は8人います。7年生、8年生、10年生、12年生の生徒が所属しています。12年生の先輩方が普段の練習を引っ張ってくれています。また、音楽祭などのステージでは、玉川の卒業生（OG）も一緒に演奏に参加してくれます。部内の他の生徒たちともすごく仲良くなれて、ひとつのチームとしての絆を感じています。



Q. 部員は全員女子ですが、男子生徒にも入部をおすすめしますか？

L：もちろんです！絶対に楽しいですし、重いハンドベルを運ぶのを手伝ってもらえますから！（笑）

Q. ハンドベル部は週に何回活動していますか？

H：週に3日活動しています。放課後に1時間半ほど練習しています。音楽祭などのイベント前になると週4日に増えて、土曜日にも練習を行うようになります。

Q. ハンドベル演奏のどんなところが魅力ですか？

H：たくさんの種類のベルを使うのですが、一つひとつに固有の美しい音色があって、それを響かせるのがすごく楽しいです。

L：簡単すぎず、かといって難しすぎない絶妙なところが気に入っています。誰でも挑戦できて楽しめる楽器なんです。

Q. 演奏していて一番好きな曲のジャンルは何ですか？

H：私はクリスマスソングを演奏するのが好きです。

L：私はJ-Popのような、テンポの速い曲を演奏するのが好きです。



Q. 上手にハンドベルを演奏するためには、どんなスキルが必要ですか？

L：「コミュニケーション」です。演奏中は他のメンバーとしっかり目を合わせる（アイコンタクトをとる）必要があります。また、曲のリズムを正しく保つための正確なタイミング（拍感）も欠かせません。

H：他のメンバーとテンポをぴったり合わせることです。普段の練習ではメトロノームを使ってテンポを身体に染み込ませています。本番では使えないので、お互いを見合って、音をよく聴き合わなければなりません。また、響かせ方を細かくコントロールする技術も必要になります。



Q. 先日の音楽祭（Musical Festival）のステージに立った時は、どんな気持ちでしたか？

H：すごく緊張しました！しっとりとした落ち着いた曲調だったので、ミスをしたら目立ってしまう状況だったんです。最初のベルを鳴らす瞬間は、本当にドキドキしました。

L：私は音楽祭への出場が3回目だったので、そこまで緊張しませんでした。本番はテーブルの上に楽譜を置いて演奏したのですが、途中でページをめくることができないため、一曲まるごと暗記して演奏に臨みました！

Q. 新しい曲の練習は、どのように進めていくのですか？

H：音楽祭などの本番に向けて、みんなで楽譜を暗記していきます。

L：時には一度に5曲も演奏しなければいけないこともあります。全曲を暗記するのはすごく大変なので、楽譜を見ながらしっかり頭に入れていきます。



Q. ハンドベルを覚える（マスターする）のは難しいですか？

H：いいえ！最初は2～3個のベルを担当することから始めるので大丈夫です。楽譜の中で自分が演奏するパートに丸をつけて練習します。上達してきたら、担当するベルの数を少しずつ増やしていきます。

Q. ハンドベル部を（他の生徒に）おすすめする理由は何ですか？

H & L：優しい先輩や仲間がたくさんいて、すごく楽しいし、決して難しくないからです！

Q. 入部を迷っている人へのアドバイスやメッセージをお願いします！

H & L：楽器を弾いたことがない人や、楽譜が読めない人でも、誰でも大歓迎です！練習を重ねていく（経験を積む）ことが上達への何よりの近道です。

それに……12年生（高3）の先輩方が引退してしまうと、部員が5人だけになってしまうんです！だから、新しい仲間が来てくれたら本当に嬉しいです！



T.M.



Q. 今シーズンの野球生活の中で、最も心に残っている瞬間は何ですか？また、なぜそれが特別なのでしょうか？

A. 今シーズン最も心に残っているのは、12年生（高校3年生）のチームメイトと共に挑んだ最後の夏の大会です。予選の初戦で都立調布北高校に勝利を収めた瞬間は、今シーズン積み重ねてきた自分たちの血のにじむような努力が実を結んだことを証明してくれた、決して忘れることのできない最高の思い出です。

続く予選第2回戦では東京学芸大学附属高校に惜しくも敗れてしまいましたが、最後まで諦めずに全力を尽くしたチームの戦いぶりを心から誇りに思っています。12年生（高校3年生）にとってこれが最後の大会だと分かっていたからこそ、一回一回、すべてのイニングが特別な意味を持っていました。

この経験を通して、高校野球とは単に試合に勝つことだけではなく、仲間との絆、情熱を注ぐこと、そして共に創り上げる一生の思い出こそが大切なのだと改めて実感しました。

Q. 野球は特に「チームスポーツ」と呼ばれます。チームの一員として活動する中で、チームワークやリーダーシップ、そして粘り強さについて何を学びましたか？

A. 今シーズンを通して、成功とは「お互いを信頼し、支え合うこと」から生まれるのだと学びました。選手一人ひとりに異なる役割があり、グラウンドの上にはいないメンバーであっても、チームのパフォーマンスに大きく貢献しています。

また、12年生（高校3年生）の先輩方からは本当に多くのことを学びました。どんなに苦しい状況でも前を向き続ける姿勢、日々の練習にひたむきに取り組む姿、そして何よりチームのために自分を捧げる姿勢を、背中で教えてくれました。

Q. 野球部への入部を考えている後輩たちへメッセージを送るとしたら、どんな言葉をかけますか？

A. 野球には、強い覚悟と自己規律、そして諦めない粘り強さが求められます。しかし、そこで得られる経験にはそれ以上の価値が絶対にあります。技術的な上達だけでなく、責任感やチームワーク、そして困難を乗り越える力を身につけることで、一人の人間としても大きく成長できるはずです。

つらい日もあるかもしれませんが、たゆまぬ努力を続け、仲間を支え合っていけば、高校生活が終わった後も一生心に残り続ける最高の思い出と友情を手に入れることができますよ！





Eye health Awareness

目の健康を考える

Munetaka Soai, Lead teacher for Gr10-12

「Zoffが学校を対象とした面白いプログラムがあるのでどうですか？」とセカンダリーの稲石先生から資料を受け取ったのが2025年7月。「目の健康の啓蒙活動」という馴染みのないゴールに半信半疑で話を聞き、高等部卒業生（2019年度）のA.S.さんも同会社のPR部門の担当ということで、幾度となく話を伺った。

「健」は全人教育における6価値の1つである。熱中症予防や日焼け予防などの健康問題は巷ではよく取り上げられるが、「目の健康」というのはまだ余り注目を集めていない。しかし、IBではほぼ毎時間PCを授業で使い、通学時間も長い生徒もあり、一般の高校生よりも目は酷使している方といえる。まずはとりあえずやってみようということで保健体育科の協力の下、高校段階（Gr10-Gr12）での実施の運びとなった。

Zoffの玉川学園担当の高杉さんと何回もやり取りをする中で、他校での先行事例を伺った。実行委員会形式を採択している学校が多く、生徒が様々な形で関わっていた。「サングラスの無償提供」とはいえ、いろいろと考えることは多い。「制服にも似合うサングラス」というコンセプトに沿ったサングラスでなくてはならず、とはいっても、生徒が自分のセンスに合わせて選択できる自由も欲しい。まず玉川学園での選択肢を作成すべく、Zoffからレンズとフレームのサンプルの提供を受けた。その数フレーム約40、レンズ30程度、総組合せ数120以上となる大量であった。

まずは、先生方で一番問題となるレンズの色味とフレームを10程度選択した。透明色を中心に薄い色がついたものも含めて約10程度に絞り込む。その後、当時11年生（現12年生）のIB生徒会の生徒とファッションリーダー的な有志と共に、「玉川8モデル」を作成した。



ほぼ同時にEye Protection Project実行委員会を立ち上げ、一緒に啓蒙活動に取り組んでくれる生徒を募集。EPPC57名（対象生徒の約50%）もの生徒が登録して活動を開始した。人数は人数が多く、多忙なDP生のため、帰宅後にオンラインで委員会を実施した。EPPへは合計137名が登録（生徒104名＋教職員33名）した。

発注したサングラスは7月上旬に完成し、7月16日に引き渡し式を実施した。テーマは委員長のYさんと副委員長のSさんと相談して「UV Commit Ceremony」とし、ハワイをテーマに賑やかなセレモニーとなった。

そこではIBらしく和洋折衷でお琴とフラダンスのコラボレーションを実現。Yさんの琴の音色をウクレレ代わりにSさんがフラダンスで「リロ&スティッチ」の「アロハ・エ・コモ・マイ (Aloha E Komo Mai)」を踊った。会場も巻き込み、新しいプロジェクトの門出を祝った。

今後は、学園UVマップの作成や10月末に実施するフィードバックの集計と分析を行っていく予定である。今後ともご理解とご支援をお願いしたいプロジェクトである。

Strike a chord for charity

チャリティの想いにのせて奏でる音色

J.E. (本文) E.Y. (写真)

**J.E.が、
赤十字のために
6,000円を集めた
チャリティーコンサートに
ついて報告します。**

7月17日、Kotone Kosuzu、Mia Main、Mashiro Matsuoka、そして私は、日本赤十字社への募金を集めるためにチャリティーコンサートを開催しました。私たちのバンドに加え、Grade 9のEさんとKさんたちも演奏に参加し、この活動への募金に協力してくれました。

K、M、そして私は、昨年 Community Projectの一環としてチャリティーコンサートを開催し、とても楽しい経験をしました。また、募金を集める良い方法であることが分かったため、今年も開催することにしました。私は、チャリティーコンサートは Service as Actionにとっても適した活動だと思います。楽器を演奏できるようにになりたい人や、人前で演奏してみたい人にとっては、比較的小さな観客の前で挑戦したり、仲間と一緒に音楽を演奏したりすることを学ぶ素晴らしい機会になります。それだけでなく、自分が応援したい慈善団体のために募金を集めることができ、その募金が直接人々の助けになるため、とても意義のある活動です。

私たちが赤十字社への募金を選んだ理由は、日本国内や世界各地で起こるさまざまな危機に目を向けてもらいたいと考えたからです。日本赤十字社は90か国以上を支援しており、世界各地での緊急支援や核兵器廃絶への取り組みなど、さまざまな活動を行っています。このチャリティーコンサートを通して、この活動のために約6,000円の募金を集めることができました



私たちはみんな、人前で演奏することが大好きです。特に、皆さんが手拍子をしたり、一緒に歌ってくれたりすると、とても嬉しくなります。音楽は人と人をつなぐものです。練習や努力の成果が実り、皆さんが楽しみながら私たちの演奏を聴いてくださる姿を見ることは、本当に大きな喜びです。だからこそ、そのような機会があればいつでも演奏したいと思っています。



もし音楽に挑戦してみたい、特に人前で演奏してみたいと思っているなら、ぜひ勇気を出して挑戦してみてください。最初の一步は誰にとっても怖いものですし、人前での生演奏はさらに緊張します。しかし、本当に音楽を演奏したいという気持ちがあるなら、人前で自分のベストを尽くすことが何より大切です。



そして、練習は必ず成果につながります。ぜひ精一杯頑張って、たくさん練習してください！

今後、私たちが開催するチャリティーコンサートに参加してみたいと思う人がいたら、ぜひいつでも気軽に声をかけてください！



Rinkan Gakkou

G6 Summer Camp

カヌー体験や登山、キャンプファイヤー、そして歴史ある日光東照宮の散策まで、今年の6年生の林間学校は忘れられない冒険でいっぱいの時間となりました。

今月号では、Sayuri KanedaさんとMei Ohgaさんが、住み慣れた「コンフォートゾーン」を一步踏み出したことで、どのように新しい友情を育み、自信を深め、自然への感謝を深めていったのかを振り返ります。

二人のストーリーは、「最高の学びは、自ら立ち向かった挑戦の中にこそある」という大切なことを私たちに教えてくれます。

私はいつもホームシックになって楽しめなくなるのが怖くて、今年もその不安が消えたわけではありませんでした。

そんな中で私が一番好きだったのは、みんなで山に登った時間です。最初は正直、誰も山なんて登りたくなかったんじゃないかと思います。でも山頂が近づいてくると、自分自身や疲れ果てている友達をみんなで応援し合い始めました。登りたいという気持ちへとみんなの心が変化していくのを見て、本当に素敵だなと感じました。

カヌーも大変な瞬間がありましたが、とても面白い体験でした。漕ぎ始めた時はパートナーとうまく息を合わせられなかったのですが、周りの自然や目的地が見えてくると、お互いにタイミングを合わせて漕ぐコツを掴むことができました。

登山は標高も高くて大変でしたが、体力を鍛えるとても良い機会になりました。最初は登山ってすごくハードなスポーツだなと思っていたけれど、山頂にたどり着いた時には大きな達成感を味わうことができました。

尾瀬国立公園（尾瀬ヶ原）を歩くのもすごく体力が要りましたが、いろいろな種類の豊かな自然を見ることができて本当に楽しかったです！

M.O.





林間学校に行く前は、カヌーやハイキング、登山といった新しい挑戦に対して少しドキドキしていました。

お友達や先生方と過ごした時間はどれも最高でしたが、私にとって一番のお気に入りにはキャンプファイヤーとバスの中での時間です。素敵な時間を準備してくれた友達、そしてバスの中をすごく盛り上げてくれたクラスメイトのみんなに心から感謝しています！

また、カヌーに乗るのも今回が初めてでした！最初は漕ぎ方の説明を聞いて「難しそうだな…」と思いましたが、一緒に乗ってくれたHの手助けのおかげで、本当に楽しい体験になりました。

日光白根山の登山は本当に大変だったと思います。倒木を飛び越えたり、崖から落ちそうになったりしながらたくさんの難関を乗り越えたからこそ、山頂にたどり着いた時は大きな達成感を味わえました。本当に楽しかったです！

同じように、尾瀬国立公園を歩くのも楽ではありませんでした。多様な自然を肌で感じ、目にすることができ、「自然の楽しみ方」を学ぶことができました。

キャンプファイヤーも本当に素晴らしい体験でした。普段はあまり一緒に過ごす機会がないSecondaryのみんなと一緒にアクティビティに参加できて、すごく楽しかったです。IBの「ATLスキル」のひとつである「コミュニケーションスキル」も身につけられたと感じています。

日光東照宮では、「鳴竜（なきりゅう）」や「眠り猫」といった有名な見どころをたくさん見学することができました。特に鳴竜の鳴き声はとても強く印象に残っています。

今回の林間学校を通して、自然に対する多様な見方（視点）を学べたと感じています。また、これまで体験したことのないチャレンジに飛び込み、時間管理の方法を学びながら全力で楽しむことができました！

Sayuri Kaneda



どこで育ちましたか？
私はパナイ島のイロイロで生まれ、メトロ・マニラ（マニラ首都圏）のケソン市で育ちました。

教師になろうと思ったきっかけは何ですか？
私が教師を目指すきっかけとなったのは、小学1年生の時の担任の先生でした。先生は思いやりの心そのもののような方で、子どもたちに教えることを心から愛しておられました。先生の温かさと情熱にインスピレーションを受け、私も教育の道を志すようになりました。

担当している教科は何ですか？また、なぜその教科に魅力を感じているのですか？
私は数学を教えています。生徒たちが問題解決能力や批判的思考力（クリティカル・シンキング）を育む手助けをすることに、大きな喜びを感じているからです。
数学は単なる数字の計算にとどまりません。論理的に考え抜く力や、諦めない粘り強さを養ってくれます。そしてこれらは、私たちが日常を生きていく上で欠かせない大切なスキルなのです。

生徒がこの教科（数学）で成果を出すためのアドバイスをお願いします。
私から生徒たちへのアドバイスは、「コツコツと練習（演習）を続けること」「授業中のディスカッションで分からないことがあれば積極的に質問すること」、そして「間違えることを決して恐れないこと」です。
数学は忍耐強さと粘り強さを教えてくれます。そして、すべての間違いは新たな学びを得るための絶好のチャンスなのです。

玉川で働くことの一番の魅力は何ですか？
玉川で働く一番の魅力は、手厚いサポートをしてくださるリーダーシップチームと、互いに協働し個人としての成長を励まし合える同僚たちの存在です。
また、学校がバランスの取れた人間形成（ホリスティックな発達）を重視し、「全人教育」に強い情熱を注いでいる点に深く共感し、感謝しています。

生徒たちのどんなところが一番好きですか？
私が生徒たちを大好きな一番の理由は、彼らの「創造的かつ批判的に考える力（クリティカル・シンキング）」です。知識が豊富で、数学においても非常に高い能力を発揮してくれます。
自分の理解を活かして問題を解決し、新しいアイデアを探求し、学びの中で自信を深めていく姿を見ることは、教員としてこの上ないやりがいです。

お気に入りの学校行事は何ですか？
一番好きな学校行事は「インターナショナル・デイ」と「マス・デイ（数学の日）」です。これらの行事は、生徒同士の強い絆を育み、温かい仲間意識を生み出す素晴らしい機会になっています。

なぜ日本で教えたいと思ったのですか？
温かく迎え入れてくれる人々、効率的な交通システム、ユニークで美味しい食文化、そして抜群の治安の良さなど、働く場所として素晴らしい魅力に満ちている点に惹かれたのがきっかけです。

GET TO KNOW YOUR TEACHER

日本と母国の最大の違いは何だと思いますか？

日本と私の母国の最大の違いは、日本の人々が一般的に時間厳守やルールの順守、そして社会秩序の維持をととても大切にしているのに対し、フィリピンの人々は家族同士の密接な繋がりを何よりも大切にしている点です。

IB（国際バカロレア）の「学習者像（IB Learner Profile）」の中で、最も大切にしている属性は何ですか？その理由も教えてください。

A. 私が最も大切にしているIB学習者像の属性は「Principled（信念を持つ人）」です。一人の教育者として、自らが誠実さ、公平性、そして責任感のお手本となることが不可欠だと考えているからです。



これまでに住んだことのある国はどこですか？そこでの思い出深い経験も教えてください。

これまでにフィリピンと日本で教えてきました。フィリピンでは小学校、中高（中等教育）、そして大学の各レベルで教壇に立ちました。小学校での指導はクラス運営（学級経営）のスキルを磨き、小さな子どもたちに対する忍耐力を育ててくれました。一方で大学での指導は、自身の「教える技術（指導法）」を極める大きな糧となりました。

ご自身についての「ちょっと意外な事実」を教えてください！

フィリピンの美しいビーチに行くのが大好きなのですが……実は泳げないので、海を100%楽しみ切ることができません！（笑）

一番好きな食べ物は何ですか？

甘みとコク（旨味）のある特製ソースがかかった「とんかつ」が大好きです。

ソウルフード（ほっとする大好きな料理）は何ですか？

私のコンフォートフード（心の糧となる料理）は、フィリピンの伝統料理「アドボ」です。実家の思い出や、家族みんなが集まった温かい時間を思い出させてくれます。

世界で一番お気に入りの場所はどこですか？

アンコール遺跡群（カンボジア）です。素晴らしい建築美、美しい情景、そして豊かな文化と歴史の深さにとても魅了されています。

授業の中で、どのようにして「グローバルな視点」を育てていますか？

私の数学の授業では、IB MYP のグローバル・コンテキストである「グローバル化と持続可能性」に関連する、現実世界の課題や具体的な事例を取り入れることでグローバル思考を育てています。生徒たちは気候変動、人口増加、金融、そして持続可能な開発といった地球規模の諸課題を、数学を通して探究していきます。

日本で一番お気に入りの場所はどこですか？

沖縄です！豊かな自然の景色と、美しいビーチが大好きだからです。

これまでに訪れた中で、一番好きな都市はどこですか？

クアラルンプール（マレーシア）です。マレー、中国、インドの食文化が融合した料理、現代的な超高層ビル群、そして多様な文化が交差しているところが魅力です。

一番好きな旅行先（バカンスの地）はどこですか？

タイのバンコクです。美味しいタイ料理や、独自の文化・伝統にとっても魅了されています。

一番好きな本は何ですか？

ロバート・キヨサキ著の『Rich Dad Poor Dad（金持ち父さん 貧乏父さん）』です。自分のお金の管理方法を教えてくれた大切な一冊です。

一番の趣味は何ですか？

バドミントンをすることです。

一番好きな言葉（名言）は何ですか？

老子の「千里の道も一歩から」という言葉です。

